

重点取組 分野	令和 元 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きては たく知	①校内授業研究、研修会やメンターチーム「チームヒガカモ」を活用し、授業力向上を目指す。 ②家庭学習の定着に向け家庭・生徒へアプローチし「学び場」を継続して実施する。 ③学びで得たことを学校生活に生かし、自己実現の意欲を高める。 ④定期テストと横浜市学力状況調査の分析結果をもとに授業改善を図っていく。 ⑤ICT機器を各教科で活用し、効果よい授業を目指す。	・校内研修を充実させ、授業力向上を図ることができた。長期休業を含め家庭学習を意識づけたり、「学び場」の活用を図ったりすることができた。 ・睡眠時間を含めた体調管理や学習習慣を振り返り、自分をマネージメントする意欲を高めることができた。教科書を生かした授業展開を目指し、指導内容に関連する資料も生かし、生徒の思考を深めることができた。 ・授業形態の工夫、行事や課外活動でコミュニケーションをとる場があり人間関係作りを促すことができた。さらに体験を通して自信を身につけ自尊心が育つように取り組んでいきたい。	B
豊かな心	①自尊心を大切にし、体験を通して他者理解を深め、豊かな人間関係を作る。 ②特別な教科道徳の授業を通して道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を養っていく。	・道徳の教科化に伴い授業力向上を目指して校内研修を行い、教科指導についての理解を深めることができた。教科書を生かした授業展開を目指し、指導内容に関連する資料も生かし、生徒の思考を深めることができた。 ・授業形態の工夫、行事や課外活動でコミュニケーションをとる場があり人間関係作りを促すことができた。さらに体験を通して自信を身につけ自尊心が育つように取り組んでいきたい。	B
健やかな体	①新体力テストの結果を分析し、家庭生活と関連付けた体力の向上、生活習慣の改善を図る。 ②自己の健康のために、主体的に課題解決できる子どもの育成を目指す。 ③健康の保持増進のために学校保健委員会が研究発表し、全校生徒・保護者へ発信する。	①授業等で結果に基づいた指導を進めた。さらに指導の成果に目を向け、生活習慣の改善につなげた。 ②保健分野の授業では、自己の健康に関心を持ち春期に望ましい生活等を実践できるような授業を展開した。 ③学びで得たことを学校生活に生かし、自己実現の意欲を高める。 ④定期的な健康診断や健康診断結果をもとに授業改善を図っていく。 ⑤ICT機器を各教科で活用し、効果よい授業を目指す。	B
平和教育	①全校での道徳や人権講演会などを通して、広い視野で平和への興味・関心をもたせる。 ②戦争についての講話、史跡の見学、道徳の授業を通して戦争について学習し、平和について多くの視点を持たせる。 ③広島・京都の修学旅行を通して、平和への理解をさらに深め、自分たちの生活と結びつけて平和への思いを継続的に考えさせる。	各学年具体的な取り組みを通して目標を達成できた。来年度は、場所が長崎に変わるため広島の最後の修学旅行となった。3年生全員で講話をする平和集会は広島修学旅行の集大成となる集会だった。事後学習も積極的に各教科などに触れるように努力をした。課題として、様々な考え方を持った生徒や保護者がいるので教師が考えを押しつけないように生徒に答えを見つけて出さず聞かせることが必要だと考える。	A
生徒指導	①問題行動の未然防止ができるよう、その場に応じた適切な声掛けや呼びかけを積極的に行う。 ②生徒一人ひとりの気持ちを受け止め、共感しながらその場に応じた適切な判断ができるよう前向きな声掛けをしていく。 ③職員研修を行い、危機管理意識を高め、職員の見守りやそらえながら子どもと関わっていく。 ④保護者、地域に情報発信しながら連携を深め、協力をしながら子どもの健全育成に関わっていく。	生徒指導部内での共有や問題行動等への対応など協力して行うことができた。 また各学年の問題や課題に対して意見交換しながら大きなトラブルなく進めることができた。しかし、最近では時代にあった生徒指導について考えたいという声も聞かれ、意識を高めたいと考えている。校務や保護者のニーズなど、職員や学校が苦しくないような指導体制をつくってきたい。来年度は、生徒と一緒に考えていくことも増やしていかなければいけないのかもしれないと考えている。	A
特別支援教育	①校内の特別支援委員会を活性化し、情報交換、連携をさらに密にすると共に、外部機関との連携、協力を深める中で、個々の生徒に応じた支援を行う。 ②「個別の指導計画」を作成し、支援が必要な生徒に3年間を通じた支援に応じた支援を行う。 ③特別支援教室では学習支援や教育相談を行い、苦手な部分をフォローする中で教室でのつまずきを解消していく。	・特別支援教室が2年目を迎え、システムが確立され利用している生徒もサポートのおかげで進歩も決定することができた。今後は住み分けの部分を柔軟に考え、利用者の実態に合わせた支援を考えていきたい。 ・個別の指導計画、支援計画の活用がまだ浸透していないので、連携を取りながら引継ぎを丁寧に進めていきたい。 ・校内委員会は意見交換や情報共有も丁寧に進めることができたが、全体共有が甘かったように感じるので、今後は協議内容を全体に発信することを意識して進めていく。	B
地域連携・ 学校運営協議会	①地域学校協働活動推進員（学校・地域コーディネーター）が運営する地域学校協働本部を中心に、学習ボランティアを募り、放課後の学習支援事業を充実させる。 ②生徒の福祉ボランティアや地域行事での仕事体験受け入れ先拡充のために協議会メンバーに協力を仰ぐ。	・地域の方に「学び場」で教えていただく中で、生徒が楽しんで学ぶ姿が見られた。3年生は受験前に「模擬面接」に協力いただき大きな成果をみることもできた。 ・ボランティア活動では学校内外ではできない活動の中で自信をつける生徒もいた。成果をあげているが、生徒の意欲がありながらも課外活動との重複がある場面など課題がある。	B
いじめへの 対応	①日頃からの生徒の実態把握や保護者との人間関係を作り重点を置き、常に相談ができるような信頼関係づくりに重点を置く。 ②常日頃から未然防止を心がけ、日頃から人の気持ちや考えをアンテナ高くし対応できるように努める。 ③初期対応を大切にし、生徒や保護者の立場や状況を考えながら丁寧な対応を図る。 ④毎月の生活アンケートを実施し、子どもの気持ちや考えをしっかりと受け止め、状況に応じた対応ができるよう心掛ける。	・毎月の生活アンケートで心配な生徒には丁寧に教育相談を行うことができた。来年度以降も丁寧な対応を心がけたい。 ・いじめ防止対策委員会では子どもと大人の対応の違い、情報を共有しながら丁寧な対応を意識して行うことができた。また保護者とも連携を取り進めることができたので、引き続き心掛けていきたい。 ・子どもの実態を把握することや人間関係の観察を丁寧に行うなど、小さな変化も見逃さないように丁寧に関わり心掛けて、相談しやすい人間関係を作っていく。	B
人材育成・ 組織運営 (働き方改 革)	①「チームヒガカモ」を組織し、様々な角度から意見を出し合い、学びの場になるよう努める。 ②校内授業研究を行い、指導、助言を受け、意見交換をしていく。 ③指導主事を要請し、校内で授業参観を行い、研究協議をする。 ④学校経営に必要な企画について、主幹会で情報交換をする。 ⑤勤務時間外の業務時間内容の見直しをし、是正を図る。	・研修会を複数回もつことによって、他学年や違った立場との意見交換ができて、視野が広がった。また、親戚も深まった。人材育成という側面からも助言しやすい環境づくりにできた。今年度は特に道徳研修を深めることができた。今年度での研修を積み重ね、さらに学年間で情報交換ができ、充実した研修となった。人材育成の機会としても良い展開ができた。研修時間の確保が課題である。	B
ブロック内 評価後の 気付き	平和教育、健康教育、生徒指導など、生徒の実態把握を行い、生徒一人ひとりに寄り添った取組がなされてきました。対話を大切にし、教師と生徒が共に課題について考えたり答えを見つけ出したりしていくことを目指す姿勢が東鴨居中学校の良さであると感じました。また、「学び場」、「模擬面接」など、地域の教育力も大いに活用され、地域とともに子どもたちを育てる教育体制が、子どもたちの生き生きとした学びにつながっているように思います。		
学校関係者 評価	・学校全体が落ち着いた雰囲気、子どもたちの表情も良いと思います。 ・地域活動のボランティアなど、主体的に取り組む子どもたちの姿に取組成果の一端が表れていると思います。 ・小中の交流はいろいろな場面で見られるので、自然形で出ていきたいと思います。 ・ICT機器の導入が始まっているが、まだまだ使い慣れないところまで達していないと思います。 ・とろろ毛では福祉体験、平和学習、ボランティア活動など卒業以外の活動を通して豊かな心を育んでいると思います。 ・平和教育は、3年間のつながり、教室での学びと体験学習のつながりがよく考えられており、着実に成果をあげていると思う。 ・個別支援級の生徒が多くて大変だと思いますが、よく努力されている様子うかがえます。		
中期取組 目標 振り返り	・重点取り組み分野「生きてはたく知」について次期学習指導要領に向けて校内研修において「評価」「評定」に関して共通理解を図ってきたい。 ・「地域連携・学校運営協議会」については目的機能を再確認し、地域・学校協働本部とともに有効活用していきたい。 ・「働き方改革」については、校内委員会において取組重点項目を定め実践していきたい。		

重点取組 分野	令和 2 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きては たく知	①校内研修会やメンターチーム「チームヒガカモ」を活用し、授業力向上を目指す。 ②家庭学習の定着に向け家庭・生徒へアプローチし「学び場」を継続して実施する。 ③学力分析結果をもとに授業改善を図っていく。 ④ICT機器を各教科で活用し、効果的な授業へ改善する。	・デジタル教科書を用いて、式が表す意味や作図の仕方などを視覚的に理解できるように努めた。 ・定期的な指導主事に授業を見ていただき、授業改善を図ることができた。 ・2人のデジタル教科書やみらいスクールステーション等のICT機器を活用して授業を行うよう心がけた。さらに使いこなせるよう努力したい。	B
豊かな心	①自尊心を大切にし、体験を通して他者理解を深め、豊かな人間関係を作る。 ②特別な教科道徳の授業を通して道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を養っていく。 ③道徳の授業力向上のため、学年内で協議し、校内研修で理解を深める。	昨年度の道徳の研究実践を生かし、各学年で見直しをもって生徒の状況に合わせた授業を展開することができた。各学年の資料をきちんと集約し、さらに3学年で系統立てた授業展開を目指したい。 ・教科書の内容に沿ってだけでなく、より良い教材や授業法を検討しながら年間計画を立てて進めていくことが大切だと感じた。	B
健やかな体	①体づくり運動を通して体力を分析し、日常と関連付けた体力の向上、生活習慣の改善を図る。 ②自己の健康のために、課題解決できる能力の育成を目指す。 ③健康の保持増進のために学校保健委員会が研究発表し、発信する。	めあての提示と、自己の課題に応じた練習方法や課題解決に向けての取り組みが選択できる授業展開を行った。種目の特性や、生業の実態に応じたツールや用具の使い方や場の工夫をする中で、仲間と協力して課題解決に取り組む内容に重点を置いて指導した。音響設備があったが、学校保健委員会の充実、保健体育の充実と体育への意識付けがあり、生徒一人ひとりが体を動かし、姿勢を意識し、生活サイクルを考えた姿勢が見られ、一定の教育効果は上がったと思う。	A
平和教育	①学年での道徳の授業、戦争についての講話、人権講演会などを通して、広い視野で平和への興味・関心をもたせる。 ②長崎の修学旅行を通して、平和への理解をさらに深め、自分たちの生活と結びつけて、平和への思いを継続的に考えさせる。	平和学習では、「原爆平歌」の映像資料を活用し、戦争、人権差別などへの関心をもたせることができた。 ・3年生の学習をもとに、プレ平和集会の開催を目指し、継続的な学習に取り組んでいる。生徒は意欲的に学習に取り組んでいる。 ・3年生の手話コースに2年生が感動した経験を今後の平和学習につなげたい。	A
生徒指導	①問題行動の未然防止を心がけ、声掛けを積極的に行う。 ②生徒の気持ちに共感しながら、適切な判断ができるような声掛けを心がける。 ③職員で常に情報共有し足並みを揃え子どもと関わる。 ④サイバー防犯教室を実施し、生徒自身がネットトラブルを回避できるようにする。	大きな社会行動が見られなかったのは、日々の生活を観察し適切な場面で声をかけ、保護者や他機関と連携をとっているからだと思う。非社会行動に陥ってしまう生徒に対して、より丁寧な多角的なアプローチができるようになった。アンケートを効果的に生かしている。 ・学年や全体への情報共有を意識することができた。また、適切な判断をするために、その場で判断しないように心がけ、周りの意見を参考にし対応するように努めた。	A
特別支援教育	①校内の特別支援委員会を活性化し、情報交換、全体共有を行う。外部機関との連携、協力をして個々の生徒に応じた支援を行う。 ②別室登校生徒と特別支援教室への入級生徒の住み分けをし生徒の実態に応じたサポートをする。 ③個別の指導計画・支援計画を活用した指導を行う。	・後期になり支援を必要とする生徒への取りだし、デキタスの利用などサポートができてきた。学校に來れていない生徒への支援は今後は、考えて行きたい。 ・今年度は利用生徒も増え、しっかりと住み分けができて個人に応じたサポートができていく。また途中からデキタスが入ったことで、よりよい形の支援ができるようになると思う。 ・特別支援委員会、情報交換や指導方針の確認ができた。	A
地域連携・ 学校運営協議会	①地域学校協働活動推進員（学校・地域コーディネーター）が運営するヒガカモの会を中心に、学習ボランティアを募り、放課後の学習支援事業を充実させる。 ②地域行事のボランティア活動に生徒が積極的に参加するよう促し、地域と連携し主体的に活動する生徒を育成する。	・今年度は制限がかかり十分な活動はできなかったが、それでも面接練習など校内の活動に協力していただき、来年度へのつながりがあると思う。 ・地域のボランティアは今年度はできないが、できる活動から地域との連携を意識していきたい。 ・今年度の状況から来年度はどの範囲で行うかの、事前の確認が重要。昨年度からの引継ぎも丁寧に行えることと良い。	B
いじめへの 対応	①子どもの実態把握を丁寧に行い、相談しやすい関係を作る。 ②いじめ防止対策委員会を通じて情報を共有し、チームで生徒を見守る体制を作る。 ③生活アンケートから生徒の気持ちに気付けるよう心掛ける。 ④YPAアセスメントを実施し、集団の実態把握に努めるよう心掛ける。	・大きないじめ案件はなかった。ただ、SNSなど水面下のトラブルはたくさんあると思われる。生徒の日々の様子もしっかり見ていき、生徒が困ったとき相談できる関係性をしっかりと作りたい。 ・学年を超えて情報の共有がなかったり、生活指導部内や専任に対して報告、相談しやすい環境は今後も大切にしていきたい。しかし、全体から見るとリスクマネジメントに対する意識に差があると感じることもある。	B
人材育成・ 組織運営 (働き方改 革)	①「チームヒガカモ」を組織し、様々な角度から意見を出し合い、学びの場になるよう努める。 ②校内授業研究を行い、指導、助言を受け、意見交換をしていく。 ③学校経営に必要な企画について、主幹会で情報交換をする。 ④勤務時間外の業務時間内容の見直しをし、是正を図る。	「チームヒガカモ」で学びを深めることができた。 ・研修で様々な考えや知識にふれることができた。 ・ITで互いの授業に入りながら、研修も積むことができた。個々どころや教材の使い方を相談したり、良い点をマネしたりしながら、授業改善に役立てることができた。 ・制限がかかる中チームを意欲した研修を積むことができた。ICT教育の研修も非常に有効だった。	B
ブロック内 評価後の 気付き	・今年度はコロナウイルスの影響で、授業参観の実施が難しく例年通りの研修会が開催できなかったため、十分な情報共有や相互理解に至らなかった。 ・各学年ごとの生徒の実態や教科指導等の現状など、必要最低限の意見交換はできていた。小学校に引き続き、中学校でも教育課程が変更されるため、次年度は情報交換も含め、スムーズな運営が期待したい。 ・例年、学校によって小中連携に対する意識に温度差があり、報告連携が円滑に行われないことが課題として挙げられている。各校の担当者が中心になって、小中一貫教育の目的が達成できるように努めたい。		
学校関係者 評価	・修学旅行の中止などで外部での平和学習ができない状態が続いていますが、戦争の映画を学校で視聴するなど校内できちんと教育が進められていると思います。 ・生徒指導は学校だけでなく、家庭との連携も必要です。SNS等活用し取り組んでほしいと思います。先生と生徒の連携もよく、先生と話している児童をよく見受けられます。 ・特別支援の生徒さんが多く、先生の負担が大きいと思いますが、よく努力されていると思います。また、一般の生徒さんも多く頑張っていると思います。 ・学校は教育相談や生活アンケートなどで生徒との対話を多く持つよう努力していると思います。		
中期取組 目標 振り返り	・学校教育目標を達成するために、生徒が今どのような状況にあり、どのような支援が必要なのかを複数の目で見えていく大切さを再確認し、生徒一人ひとりに寄り添い、日々の生活に意欲が持てるように引き続き支援を続けていく。 ・学校教育目標を意識した授業展開や学級経営を意識し、個性(個々の課題や目標)を大切にし、一人ひとりのニーズに可能な限り寄り添い、意欲的に課題解決に向かう姿勢を育むことができるよう努める。 ・GIGAスクール構想に伴い、教員の更なるスキルアップ研修の充実にも努める。		

重点取組 分野	令和 3 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きては たく知	①校内研修会やメンターチーム「チームヒガカモ」を活用し、授業力向上を目指す。 ②家庭学習の定着に向け家庭・生徒へアプローチし「学び場」を継続して実施する。 ③学力分析結果をもとに授業改善を図っていく。 ④ICT機器を各教科で活用し、効果的な授業へ改善する。	・ICTや人権等、社会情勢に合わせた校内研修が充実していた。 ・ICTを活用した授業など、常に授業力向上を意識しながら、新しいことに挑戦できた。 ・学力分析結果をもとに授業改善を図っていく。 ・学び場の継続的活用など、家庭学習が定着していない生徒への働きかけをより充実させたい。	B
豊かな心	①自尊心を大切にし、学校生活全般を通して他者理解を深め、豊かな人間関係を作る。 ②特別な教科道徳の授業を通して道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を養っていく。 ③道徳の授業力向上のため、学年内で協議したり、研修で理解を深めたい。	・自尊心を高めるため、できるだけ褒めるよう意識した。 ・コロナ禍で、子どもたちの人間関係を作る機会が減った。より工夫が必要だと感じた。 ・道徳の授業力向上のために、学年内で積極的に協議することができた。 ・共に生徒に働きかけられるような姿勢を育みたい。	B
健やかな体	①新体力テストの結果を分析し、家庭生活と関連付けた体力の向上、生活習慣の改善を図る。 ②自己の健康のために、主体的に課題解決できる子どもの育成を目指す。 ③健康の保持増進のために学校保健委員会が研究発表し、全校生徒・保護者へ発信する。	・新型コロナウイルスの感染が校内で広がることがなかったため、十分達成できたと思う。 ・保健だよりなどで情報発信をしたが、家庭との連携がなかなかうまくいかなかった。 ・体育科、部活動の力により、意欲的に取り組んでいる。 ・学校保健委員会の取組を通じて成長期の運動や食事について考え、自己の健康や体力の維持・向上への意識を高めることができた。 ・全校生徒・保護者へ発信する。	A
平和教育	①学年での道徳の授業、戦争についての講話、人権講演会などを通して、広い視野で平和への興味・関心をもたせる。 ②修学旅行に向けた事前学習や長崎での学習を通して、平和への理解をさらに深め、自分たちの生活と結びつけて、平和への思いを継続的に考えさせる。	・各学年よく考えて取り組んでいるが、修学旅行に行けない、歌が歌えないという点では、思うような平和教育ができていない。 ・「原爆・戦争教育」にならないよう、これからも広い視野で平和について考えさせていきたい。 ・3年間のつながりを意識した平和教育に意味があると思う。	A
生徒指導	①問題行動の未然防止を心がけ、声掛けを積極的に行う。 ②生徒の気持ちに共感しながら、適切な判断ができるような声掛けを心がける。 ③職員で常に情報共有し足並みを揃え子どもと関わる。 ④SNSを通じて行われるトラブルの未然防止及び効果的な対応のための啓発活動の実施。	・学年、学校内での情報共有を心がけ、問題行動の未然防止を行っていくと思う。 ・早めの対応を心掛けたが、不登校になりそうな生徒を引き上げきれなかった。 ・授業、休み時間ともに、これからも生徒の様子を見られるよう努めたい。 ・所属学年以外の生徒の情報も共有できるようにしたい。	A
特別支援教育	①情報交換、全体共有を行う。外部機関との連携、協力をして個々の生徒に応じた支援を行う。 ②別室登校生徒と特別支援教室への入級生徒の住み分けをし生徒の実態に応じたサポートをデキタスなどを活用して行う。 ③個別の指導計画・支援計画を活用した指導を行う。	・情報交換はよく行っているが、特別支援と生徒指導が同じになっていないので、分けて行った方が良い。 ・ケース会議で生徒の実態に応じた対応を考えることができた。 ・個別の支援計画が活用され始めた。今後は早めに計画をたて、より活用できるように努めたい。	A
地域連携・ 学校運営協議会	①地域学校協働活動推進員（学校・地域コーディネーター）が運営するヒガカモの会を中心に、学習ボランティアを募り、放課後の学習支援事業を充実させる。 ②地域行事等に生徒が積極的に参加するよう促し、地域と連携し主体的に活動する生徒を育成する。	・学び場など、地域の方に協力していただくことが多く、恵まれていると思った。 ・コロナ禍で、地域との交流の取り方を工夫していく必要がある。 ・地域行事のボランティアの割り当てについては、生徒の多忙さや教員の働き方改革等の観点からも見直しが必要かと思われる。	B
いじめへの 対応	①子どもの実態把握を丁寧に行い、相談しやすい関係を作る。 ②いじめ防止対策委員会を通じて情報を共有し、チームで生徒を見守る体制を作る。 ③生活アンケートから生徒の気持ちに気付けるよう心掛ける。 ④YPAアセスメントを実施し、集団の実態把握に努めるよう心掛ける。	・生活アンケート、YPアセスメントなどを活用しながら、気になることを教員で共有することができていると思う。 ・情報共有を密にして、未然防止に努めることができていく。 ・学年でアンテナを高くして、日々の生活を送っている。さらに丁寧に取り組む。	B
人材育成・ 組織運営 (働き方改 革)	①「チームヒガカモ」を組織し、経験・教科・分掌等の垣根を超えた意見交換で、人材育成につなげる。 ②学校経営に必要な企画について、社会情勢に即応した内容になるよう、主幹会で情報交換をする。 ③勤務時間外の業務時間内容の見直しをし、時間外勤務の減少を図る。	・学校経営等について、情報を共有したり意見交換することができた。 ・職員間の連携を大切にしていきたい。 ・自由に意見を言う仲間であることがいいと思う。主幹会等一部の会議で話し合われた内容も、学年等で早めに情報が共有できる。 ・勤務時間外の業務内容の見直しを進め、働き方改革の取組を続けていきたい。	B
ブロック内 評価後の 気付き	・今年度もコロナウイルスの影響で、授業参観の実施が難しく例年通りの小中連携研修会が開催できなかったため、十分な情報共有や相互理解に至らなかった。 ・教科間での共通認識は年間を通して図ることができていたため、小学校の行事等でどのようなことを経験しているか共有し、改善を重ねていくことが大切である。 ・地域とのつながりがうすれてはいるが、社会の一員として自覚を持たせるような指導を心掛けていきたい。		
学校関係者 評価	・コロナ禍の制約の中で、実施できた行事、中止せざるを得なかった行事など、難しい選択が多かったと思う。そんな中で工夫が感じられ、生徒たちは、コロナ下でも有意義な生活が送れていると思う。 ・「学び場」が定着してきたと感じる。家で勉強に集中できない生徒も「学び場」では集中できているようだ。 ・ICT機器の活用がかなり進んでいて、とても順調に活用されていると思う。 ・学力、学習状況調査の結果分析を確実にし、何かに学校に必要なものが、不足のなかを把握してほしい。 ・生徒指導、特別支援教育については、生徒ひとり一人に寄り添い、よく努力していると思う。		
中期取組 目標 振り返り	・学校教育目標を達成するために、生徒一人ひとりの現状を理解し寄り添い、教員間で情報共有することで、生徒自身が主体的に生きる力を身に付け、向上心を持てるよう、取り組むことができた。 ・学習の基礎基本の定着を図り、学校教育目標を意識した授業展開や学級経営を意識した校内研修などを充実させることできた。教科指導、ICTの活用など、より広い視点から、教員の更なるスキルアップを目指す。 ・「地域連携・学校運営協議会」については、このコロナ禍の状況を鑑み、目的機能を再確認し、地域と学校が一体となって教育活動が行われていくように連携・協働を図ってきたい。		